

## 『駿遠へ移住した徳川家臣団』における岡田清直・岡田錠次郎の謎（その3）

The Re-examination on the brief history of OKADA Kiyonao/OKADA Jyojiro in MAEDA's book, vol.3

小栗 勝也\*  
Katsuya OGURI

（承前、「3. 資料ごとの調査結果」の続き。注の番号も継承）

**No.25 の『江戸幕臣人名事典第一—四巻』（平成元年、新人物往来社）**は、浜松市立中央図書館の蔵書を確認した。前田氏が見たものは、書名中に「第一—四巻」と記されているから全4巻のもの（これを①とする）である。同書はその後、内容が改訂され、かつ1冊にまとめられたものが出版されている（②とする）。上記図書館には2種類ともあったので、筆者は両方を確認した。①の第1巻の正確な書誌情報は、『江戸幕臣人名事典 第一巻』（監修：小西四郎、編集：熊井保・大賀妙子、発行：新人物往来社、1989年5月15日）である。第2巻以下は、他の情報は同じであるが、発行時期のみが異なっている。「第二巻」は1989年8月10日、「第三巻」は1990年3月1日、「第四巻」は1990年12月1日である。②の正確な書誌情報は、『改訂新版 江戸幕臣人名事典 全一卷』（熊井保編、1997年1月1日、新人物往来社）である。

前田氏が見たのは全4巻本の方であるが、前田氏はその刊行年を平成元年と記している。しかし上記の通り、この4巻本のうち、平成元年（1989年）に刊行されたのは第1巻と第2巻のみである。前田氏は、この2巻だけしか見なかったのであろうか。それでは役に立たないはずであるから、第3巻から発行年が変わっていることを知らずに不正確な刊行年を記したのではないかと想像される。

本書の調査結果を記すと、①では第1巻の250頁に岡田錠次郎の情報が、②では、255頁に岡田錠次郎の情報が記されている。①②共に、明治になる前の経歴のみが記されている。また、いずれにも岡田清直の情報は無い。

なお、①旧版と②改訂版では岡田錠次郎の情報に差異が見られる。その差異については、既に拙稿「用行義塾の教師・岡田清直先生について」（袋井市文化協会・袋井市教育委員会編集発行『文芸袋井』第12号、平成30年3月1日、所収）で述べているので、それを参照頂くことにして、ここでは説明を省く。なお、上記拙稿において筆者は、①

の第1巻中の岡田錠次郎の掲載箇所を253頁と誤記している。250頁が正しいので、この場を借りて訂正しておきたい。

①②において、旧幕臣情報の出典の多くは、かつて江戸城の多聞櫓に保管されていた文書が基になっている（②の6頁）。岡田錠次郎の情報も、多聞櫓文書の「明細短冊」に依っている。それは現在、国立公文書館に所蔵されており、「箱館奉行支配定役元々岡田錠次郎 明細短冊」（請求番号：多 003899）の名で登録されている。上記『文芸袋井』掲載稿を脱稿した後、筆者は国立公文書館を訪れ、岡田錠次郎の明細短冊の実物を見た上で、その場で複写の依頼手続きを行い、複写物を入手している。手書きの崩し字で達筆のため、筆者には難読の文字が多く、また虫食いが激しく欠字部分があるので全体の判読が難しい。『江戸幕臣人名事典』の初版と改訂版で岡田錠次郎の情報が異なるのは、改めて実物を読み直した関係者が、新しい（正しい）解釈を与えたためであると考えられる。

前田氏は、この人名事典①から、表2で示した岡田錠次郎の情報のうち、明治になる前の殆どの部分（すなわち【C】【E】【F】【H】【J】の箇所）を引用している。ここでは、そのことだけを紹介しておきたい。

なお、前田氏が引用した情報の中には重大な問題がある。それは錠次郎の年齢についてであるが、それについては本稿の後半に置いた考察の所で詳述したい。

**No.26 の『嶽陽名士傳』（昭和24年、山田万作）**は、浜松市立中央図書館、国立国会図書館デジタルコレクション（Web）の両方で蔵書を確認した。実物の奥付には、編纂兼発行人が山田萬作（静岡市安西）、印刷人が前島格太郎（有渡郡大里村）、製本所が中川然良（静岡市七間町）と記されている。但し、発行時期は前田氏が記す昭和24年ではなく、「明治」24年10月17日が正しい。前田氏のミスと誤記と考えられる。両図書館とも登録書名は新字体の「岳

陽名士伝」となっているが、実物には「嶽」が使われているので、書名は前田氏が記す「嶽」でも「岳」でも問題はない。この本には岡田清直・錠次郎の情報はなかった。

なお、本書とは別に、『岳陽名士録』という酷似した名前の薄い冊子が両図書館に存在している。著者は同じ山田萬作であるが、出版が明治24年11月7日で半月程遅い。印刷人も先の本とは異なり、海野初太郎となっている。ほぼ同時期でタイトルも似ているので混乱するが、『名士録』の方は人名が列記されているのみで、各人の紹介文が一切なく、余り役には立たないものである。なぜこのようなものが存在するのか不思議に思う。もしかすると、分厚い『名士伝』に収録されている人物のみを索引的に紹介する目的で作られたのかも知れない。しかし、その想像が正しいかどうかは分からない。はじめ筆者も混乱したので、注意を促すために、この情報を記しておきたい。もちろん、こちらにも岡田清直・錠次郎の名はない。

**No.27 の『静岡のひとびと』(昭和49年、静岡市教育委員会)**は、浜松市立中央図書館に蔵書があり、そこで確認した。但し、正しいタイトルは『静岡の人びと』であり、前田氏が記す「ひとびと」は間違いである。発行元は静岡市教育委員会、編者は飯塚伝太郎である。また、発行時期の詳細は昭和49年3月25日である。ここにも岡田清直・錠次郎の情報はなかった。

**No.28 の『郷土の発展に尽した人々』(昭和56年、静岡県教育委員会)**は、磐田市立中央図書館の蔵書を確認した。但し、筆者が見た書は、上巻と下巻の2冊から成るものである。前田氏は上下巻があるとは記していない。奥付によると、いずれも発行は昭和56年3月20日であるが、そこには「二版発行」とのみ記されていて、初版の情報は記されていない。もしかすると、初版が別があり、それは上下の2冊ではなく1冊のみであったと仮定し、それを前田氏が見たとしたら、前田氏の記録は間違っていないことになる。しかし、同じ昭和56年のうちに、全1冊のもと全2冊の2種類を教育委員会が発行することは考え難い。実態はどうであったのかは不明である。いずれにしても、この資料の上下2冊には岡田清直・錠次郎の情報はなかった。

**No.29 の『郷土の先達』(平成2年、鈴木富男著)**は、袋井市立袋井図書館の蔵書を見た。前田氏は、平成2年、鈴木富男著、としか記していないが、更に記すべき書誌情報がある。実物の表紙に記されているタイトルは『郷土の先達 第一輯』である。但し、奥付には「第一輯」の文字はなく、「郷土の先達」とのみ記されている。奥付だけを見て書誌情報を記せば前田氏の記録のようにはなるので、第一輯の文字がなくても前田氏が誤ったことにはならない。発行時期の詳細は平成2年1月31日、発行元は富士市立中央図書館である。富士市立図書館双書第一輯として作

られたものである。また、同名タイトルの「第二輯」も存在している。鈴木富男『郷土の先達・第二輯』(富士市立図書館双書第二輯、平成9年11月3日、富士市立図書館発行)がそれであり、これも袋井図書館に所蔵されている。しかし、前田氏は平成2年としか記録していないので、第二輯は見えていないことになる。第一輯、第二輯とも、岡田清直・錠次郎の情報はなかった。

**No.30 の『静岡県德行録』(昭和16年、静岡県)**は、磐田市立中央図書館の蔵書を確認した。但し、同図書館所蔵の資料は、原資料をコピーし、それを製本したものである。実際のタイトルには、冠として「教育勅語下賜五十年記念」の文字があり、「教育勅語下賜」と「五十年記念」は2行に分ち書きされている。昭和16年3月31日に静岡県が発行したものである。ここにも岡田清直・錠次郎の情報はなかった。

**No.31 の『静岡県人物誌』(昭和49年、静岡県)**は、浜松市立中央図書館および国立国会図書館デジタルコレクション(Web)の所蔵を確認できたので、両方とも確認した。前田氏は書名として「人物誌」と記しているが、実物は「誌」ではなく「志」であり、『静岡県人物志』が正しい。静岡県の編集によるもので、昭和49年2月15日に名著出版から発行されている。岡田清直・錠次郎の情報は記されていない。

**No.32 の『東海三州人物誌』(大正3年、伊東圭一郎著)**は、浜松市立中央図書館に蔵書があり、筆者はそこで確認した。大正3年9月5日に静岡民友新聞社から発行されたものである。但し、前田氏が記すタイトルは2箇所間違っている。第1に、末尾の「誌」は不要である。同図書館では、原著をコピーしたものを製本して所蔵しているが、製本時の背文字に記された文字は「東海三州人物」で、「誌」は入っていない。しかし、実はこれも正しくない。コピーされた元の資料の扉や目次部分には「東海三州の人物」とあり、「の」の1文字が入っている。製本した図書館側も、前田氏も、そのことに気付いていない。これが第2の間違いである。正しい書名は『東海三州の人物』である。この本には、岡田清直・錠次郎の情報はなかった。

**No.33 の『静岡育英会会報』**は、磐田市立中央図書館に第4号(昭和4年1月、編集・発行=財団法人静岡育英会)のみが所蔵されており、その号については内容の確認ができた。そこには、用行義塾を支えた足立家本家の当時の当主「足立隆二」の名が、寄付者の1人として記されているが(39頁)、岡田姓の人物は「岡田竹五郎」(29頁、45頁)が寄付者として記されているのみで、岡田清直・錠次郎の情報はなかった。

なぜ、磐田市立中央図書館にこの1冊だけが収蔵されて

いるのかは不明である。県内の他図書館においても、国会図書館でも、『静岡育英会会報』の所蔵はどこにも確認することができなかった。前田氏は自身の本の中で、この資料に対して「(育英会)」の略語を付しているの、何人もの人物の典拠資料として用いていることが伺える。従って、相当数の資料を見ているはずであるが、氏はどこでこの会報を見たのであろうか。残念ながら、筆者は上の1冊のみしか調査できていない。

**No.34 の雑誌『同方会誌』(昭和52年、立体社)**は、再復刻版が磐田市立中央図書館に所蔵されており、筆者はそこでこれを見た。元々は、明治29年から昭和16年の間に、旧幕臣の子孫によって組織された同方会が発行していた機関誌『同方会報告』、および後継誌の『同方会誌』の全65号を10巻に合本して、昭和53年に立体社から復刻出版されていた。前田氏は「昭和52年」と誤記しているが、立体社による復刻は昭和53年である。氏は、この時の立体社による復刻版を見たことになる。

しかし、上記図書館に所蔵されているものは、立体社の復刻版を更に再復刻する形で、平成23年9月20日にマツノ書店が発行した全10巻+総目次のものである。筆者が見たのはマツノ書店による再復刻版であり、前田氏が見たものとは異なるが、中身は同じなので問題はない。立体社のものは、筆者には見つけることができなかった。

この資料には、前掲No.5の「静岡学問所局」の名が付された教員名簿(合本の第7巻所収)や、前田氏が使っていない明治2年2月の「静岡藩職員録」(同第7巻所収)、「静岡藩静岡学問所職員同小学校提書」(第8巻所収)、牧野原に入植した「精鋭隊惣名前(慶応四辰年四月)」(第9巻所収)などの資料も収められている。それ以外にも、筆者は全頁に目を通したが、どこにも岡田清直・錠次郎の情報は記されていない。

**No.35 の雑誌『旧幕府』(合本四冊、原書房)**は、沼津市立図書館の蔵書を確認した。但し、前田氏は合本4冊と記しているが、実際は7冊の合本から成る復刻版である。明治30年4月22日に発行された『旧幕府』第1号から、最終号である第5巻第7号(明治33年8月25日発行)までを全7冊の合本にまとめ、昭和46年4月20日から昭和46年7月15日までの間に、原書房が発行した復刻版である。前田氏は原書房と記しているの、明らかに復刻版を見たはずである。原書房の復刻版は合本7冊のものしかないのに、なぜ前田氏は合本4冊と記したのであろうか。氏は合本が7冊あることを知らないのか、7冊のうち4冊だけしか見なかったということなのであろうか。

この『旧幕府』には、函館戦争に関与した旧幕府側の人々を記した人名録が何度も掲載されるなど、資料として貴重なものが含まれている。また、前掲No.1の資料と同タイトルの「駿藩各所分配姓名録」が2回に亘って掲載されてい

る(合本五の中にある)。但し、府中奉行の中台信太郎から始まる点は、前掲No.1の所で記した③と同じであるが、③に収録されている人数より遥かに少ない。府中に分配された者の一部だけを紹介した資料なのであろうか。

この『旧幕府』の中で、「合本六」に収録されている『旧幕府』第4巻第3号の1頁から「安政六年未年五月改 函府人名録」が掲載されている。その中で、箱館奉行の「支配勘定格」の「定役元メ」の下に位置する「定役下役」の3番目に「スツ、 岡田錠次郎(原文縦書き)の名が記されていた(2頁)。筆者が求めている岡田清直・錠次郎に関係する情報はこれだけであった。「スツ、」は「寿都(すつつ)のことである。この定役下役は「高三十俵三人フチ/役フチ三人フチ/役金三十五両」(「/」は小栗が付したもので改行を意味する)と記されている(同頁)から、当時の岡田の禄高を知ることができる。

しかし、前出No.25の『江戸幕臣人名事典』の最新版である全1巻の資料では、彼は安政6年4月に「定役」を与えられたことになっているから、「安政六年未年五月改」の時点では「定役下役」ではなかったはずである。どちらが正しいのであろうか。なお『江戸幕臣人名事典』から、岡田が箱館詰を命じられて、寿都から箱館に移るのは翌安政7年であることも分かるので、安政6年の時点ではまだ「スツ、」にいたことになる。安政6年に岡田が寿都にいたという点について、2つの資料は一致しているが、肩書きに相違が見られる。その違いの理由は分からない。

また、『江戸幕臣人名事典』から、岡田の禄は「高八十俵三人扶持六十七俵御足高一人扶持御足扶持役扶持口口人扶持役金四十五両」とあるので、これが最高の禄高であったとすると、上記の「高三十俵三人扶持」という記録は、その半分にも満たない量である。

ちなみに福沢諭吉の父・百助は中津藩の下士であったが、宛がわれていた禄は13石2人扶持である<sup>(5)</sup>。福沢は『福翁自伝』の中で自家の身分について、「足軽よりは数等宜しいけれども士族中の下級、今日で云えば先ず判任官の家でしょう」と述べている<sup>(6)</sup>。判任官とは大臣や地方長官等から任命される最下級の官吏であり、いまなら県庁に勤める公務員レベルの役人と考えたらよいであろう。下級とはいえ、決して最底辺の役人ではない。この禄高は微禄であると『福澤諭吉事典』は述べているが<sup>(7)</sup>、当時の日本で圧倒的多数を占めていた普通の人々(例えば百姓)と比べたら、経済的社会的には恵まれていたと言うべきであり、赤貧洗うが如き極貧家庭であったわけではない。侍の中では下級であったというだけのことである。

福沢と比較すると岡田錠次郎の身分はどのようなものになるのであろうか。1石が何俵に当るかは時代や地域によって差があるらしいが、よく言われる換算式に当てはめて、仮に1石を10斗、1俵を4斗と考えると、1石は2.5俵となる。福沢の13石は32.5俵となり、岡田の30俵よりやや多い。岡田は1石分だけ福沢に劣ることになる。安

政6年頃の岡田錠次郎はその程度の身分であった。

しかし、岡田はその後、上述した通り、最後は80俵まで得る身分になっているから、福沢家を遥かに超え、まずまずのレベルまで出世できていたと言えよう。

ところで『旧幕府』中の記録から、岡田錠次郎の安政6年時点での肩書きが分かり、しかもそれはNo.25の『江戸幕臣人名事典』の情報とは異なっているため、前田氏が、2つの文献における情報の違いに気付いていたならば、自身の著書にも何か記して然るべきである。しかし、そのような記述は何もない。記述がないということは、前田氏は『旧幕府』を見てはいても、そこに記録されていた岡田錠次郎に関する情報には気付かなかったか、気付いていても意図的に無視したかのどちらかになるだろう。

なお、この『旧幕府』には、岡田清直に関する情報は何もなく、

**No.36の『明治宝鑑』（明治45年、原書房）**については、前田氏が記すような明治時代に原書房から出版されたものは存在するはずがない、と筆者は初めから疑っていた。原書房は戦後、復刻版を多く手掛けている会社なので、明治ではなく昭和の45年に原書房から復刻され、それを前田氏は見たのではないかと想像した。その想像は正しかった。昭和45年に原書房から同書の復刻版が出されており、それが静岡県立中央図書館に所蔵されていることが分かった。筆者もそこで復刻版を確認した。

復刻版の書誌情報を記すと、『明治宝鑑 全一卷』（明治百年史叢書第140巻、昭和45年3月20日、復刻原本＝明治25年発行、編者・松本徳太郎、発行所・原書房）となる。編者の松本は、原本の扉に「松本徳太郎編纂」と記されている人物であり、オリジナルの編者であって復刻時の編者ではない。復刻版にはなぜか、復刻に際して記されるような文章がどこにもなく、原本のみがそのまま複製本され、しかし奥付だけは原本の奥付を省いて復刻時の新しい奥付だけを付した形になっている。二千頁を越す大部の書物である。

ちなみに、原本の明治25年刊の実物は国立国会図書館デジタルコレクションにあり、筆者はそちらについても確認をしている。そこには原本当時の奥付があり、そこから書誌情報を記すと、編纂兼発行人・松本徳太郎、明治25年9月20日発行となっている。明治25年の刊行物には、前田氏が記すような原書房の文字はどこにもなく、発行は松本個人の責任になっている。以上のことから、前田氏が見たものは明治45年のものではなく、昭和45年に原書房から復刻された『明治宝鑑』であると断定できる。

この資料には岡田清直・錠次郎の情報はなかった。

**No.37の雑誌『史談会速記録』（昭和46年、原書房）**は、沼津市立図書館の所蔵が確認できたので、そこで見た。蔵書は前田氏が記すように原書房から発行されたものであ

るが、それは復刻版である。原書房と記していることから、前田氏も復刻版を見ていることになる。

また、復刻版全体は40冊以上の膨大な量があるが、前田氏は「昭和46年」（1971年）とだけ記しているため、発行された復刻版の時期を、その年だけに限ると「合本一」から「合本五」までの5冊のみが該当する。残りはそれ以降に発行され、最後は昭和51年に及んでいる。前田氏は、昭和46年のものしか見ていないことになるので、筆者も同じ5冊のみを調べることにした。しかし、前田氏が例の如く、正確な出版年を把握せず、最初の出版年だけを記せば全部を網羅できると誤解している可能性はあり、従って、前田氏が全部を見ている可能性はある。それを考えると、筆者も全部を見る必要はあるのだが、時間の都合上、ここだけは筆者の仕事が省けるのに都合のよい解釈をして、5冊のみを見ることにした。その意味で、当該資料の悉皆調査はできていないことを正直に記しておく。

対象とした合本5冊の正確な書誌情報を、それぞれの奥付を基に記しておく。『史談会速記録（全四十六巻）（合本一）』は、編者：史談会、発行所：原書房【以下、編者と発行所は全て同じなので略す】、昭和46年7月20日発行（復刻原本＝明治25年・26年発行）で、「第一輯」から「第六輯」までが収録されている。『史談会速記（全四十六巻）（合本二）』は、昭和46年9月20日発行（復刻原本＝明治二十六年発行）で、「第七輯」から「第十一輯」までが収録されている。『史談会速記（全四十六巻）（合本三）』は、昭和46年10月20日発行（復刻原本＝明治26年～27年発行）で、「第十二輯」から「第十七輯」までが収録されている。『史談会速記（全四十六巻）（合本四）』は、昭和46年11月20日発行（復刻原本＝明治27年発行）で、「第十八輯」から「第二十二輯」までが収録されている。『史談会速記（全四十六巻）（合本五）』は、昭和46年12月10日発行（復刻原本＝明治27年発行）で、「第二十三輯」から「第二十六輯」までが収録されている。

以上を調べたが、岡田清直・錠次郎の情報は何もなく、なお、既述の通り、以後の合本については実物を調べることはしなかったが、念のため、そこにも何らかの情報があつかいかどうかを簡便に確かめるため、復刻版に付された総索引（全合本が対象）だけは調べることにした。総索引の書誌情報を示すと、吉田常吉編『史談会速記録・総索引』（昭和51年4月25日、原書房）である。この索引でも、岡田清直・錠次郎の情報は何もなく、

**No.38の『静岡県現住者人物一覧』（高室梅雲著）**は、国立国会図書館デジタルコレクションの蔵書をWEBで確認した。但し、資料実物の奥付に記された編纂兼発行人は「高室茂廣」である。しかし、表紙及び扉部分には「高室梅雲著」と記されているため、前田氏の記録は間違いではない。同一人物の本名か雅号かの違いであろう。発行時期は明治29年7月29日である。ここにも岡田清直・錠次郎の情報

はなかった。

**No.39の『沼津兵学校』（昭和61年、沼津市明治史料館）**は、袋井市立袋井図書館の蔵書を確認した。沼津市明治史料館の編集・発行によるもので、昭和61年8月1日の発行である。写真が多用され、やや薄めではあるが立派な冊子である。この資料からは岡田姓の人物として、沼津兵学校附属小学校教授の中に「岡田宣（素読教授方）」（旧名は隆三、号は老峰であるとの情報もある）があること（35頁）、沼津兵学校で学んだ資業生の中に「岡田正」（第4期資業生、旧名は鉦八郎、沼津に残り教員として活躍した。最後は静岡中学）があること（44頁）、同じ資業生の第3期生として「岡田頭次郎」があること（65頁）は分かったが、岡田清直・鉦次郎の情報は何もなかった。

**No.40の『沼津兵学校とその人材』（昭和15年、大野虎雄著）**は、浜松市立中央図書館に所蔵されており、筆者はそこでこれを見た。但し、タイトルは『沼津兵学校と其人材』であり、前田氏が記す「その人材」ではない。同図書館に登録されている書誌情報にも「その人材」と記されているけれども、現物を見ると、どこにも「その」の平仮名は使われていない。また副題として「附属小学校並沼津病院」とある。著者兼発行者は大野虎雄で、昭和14年5月30日の発行（非売品）となっている。筆者が見たものは、前田氏が記す昭和15年発行ではなく、昭和14年発行のものであるが、翌年に再発行されたのであろうか。それとも単なる前田氏の誤記であろうか。

ここには、上記**No.39**と同じく、岡田頭次郎、岡田鉦八郎（正）（以上82頁）、岡田隆三（香峰）（**No.39**の雅号と異なっている。119頁）の名が見られるのに加え、沼津兵学校附属小学校の生徒として「岡田志摩吉」（121頁）があるが、岡田清直・鉦次郎の情報はなかった。

**No.41の『沼津兵学校附属小学校』（昭和18年、大野虎雄著）**も、浜松市立中央図書館の蔵書を見た。著者兼発行者は大野虎雄で、昭和18年6月10日の発行（非売品）である。ここにも、附属小学校の素読教授方として「岡田隆三（香峰）」（11頁）、附属小学校の後身小学校である集成舎変則科の教師として英語の「岡田正」（20頁）、沼津中学校の一等助教諭としての「岡田正（数、英）」（24頁）の名が記されていたが、岡田清直・鉦次郎の情報はなかった。

**No.42の『静岡名墓誌』（昭和7年、柘植清著）**も、浜松市立中央図書館に所蔵を確認できたので、筆者はそこでこれを見た。柘植清は編集兼発行人で、昭和7年9月20日に谷島屋書店内・麗澤叢書刊行会から発行されている。ここにも岡田清直・鉦次郎の情報はなかった。

**No.43の『牧ノ原開拓士族名簿』（昭和39年、金谷郷土**

**史研究会）**については、前田氏は第1編では上の様に「牧ノ原」と記したが、なぜか第2編では「牧の原」、第3編では「牧之原」と書き直している。この資料について筆者は、浜松市立中央図書館の蔵書を初めに見た。そこでの書名は『牧之原開拓士族名簿』である。但し、なぜか冒頭が4頁から始まっていて、1～3頁が欠けている上に、末尾は76頁までしかない。目次には78頁以下に付録があることが記されているのに、それが無い。また、奥付もないので、本資料が昭和39年のものであることを実物で確認することができなかった。同館の蔵書は、コピーを製本したものであるが、完全な形で再現できていないことが容易に想像できた。そこで、別に所蔵場所がないかを探した所、島田市立金谷図書館に蔵書があることが分かったので、そこで調査を行った。

金谷図書館には完全な形のものが2種類、所蔵されていた。表紙及び奥付から2つの書誌情報を正確に記すと、1つ目は『牧之原開拓士族名簿』（表紙右肩にのみ「金谷郷土史資料」とある。発行者・金谷郷土史研究会、文筆責任者・金谷小学校・鈴木武雄【ほか計16名の連名】、昭和39年1月20日第一刷、昭和41年2月1日第二刷（改訂増補）【これを①とする】で、2つ目は『牧之原開拓士族名簿』（表紙右肩にのみ「金谷郷土史資料」とある。発行者・金谷郷土史研究会、文筆責任者・金谷小学校・鈴木武雄【ほか計16名の連名】、昭和39年1月20日第一刷、昭和41年2月1日第二刷（改訂増補）、昭和62年8月1日第三刷（復刻）【これを②とする】である。

書誌情報における①と②の違いは、「第三刷」の情報が追加されていることのみである。また、①②ともに、改訂増補の発行に対して「第二刷」と記しているが、改訂した上に増補しているため、初版とは異なるので、本来は第2版と記するのが正しい。単に「第二刷」と記す場合は、前と同じ版を用いて2回目の増刷をしたという意味になるから、改訂や増補があったならば同じ版ではないので、「第二刷」と記すと矛盾することになる。版や刷の意味を正確に知らないまま、奥付の表記をしていることが分かる。

同様に、②において、「第三刷（復刻）」と書かれているが、この文字の意味するところは、同一の版を用いて3回目の増刷を行ったということである。実際には、その前の改訂増補版を基にして復刻したのなら、第2版第2刷とするか、復刻版第1刷とするのが正しい表記の仕方である。実際に②の中身を見ると、①とはほぼ同じであるが、唯一、冒頭に「牧之原開拓士族名簿原本」のモノクロ写真が1枚挿入されている点が異なっている。その意味で、①とは中身が同一ではないので、新しい版として発行されたことになるから、第3版第1刷または復刻増訂版第1刷とすべきであった。

以上の点は、プロの仕事による出版物ではないことを考慮すれば致し方のないことではある。プロの仕事でないことは、この資料が全て手書き文字によるガリ版刷り（B4

版)を山折にして袋綴じにした簡易製本冊子(B5版)であることから類推できる。出版社や印刷所は一切関与していないので、手製の冊子と言ってもよい。

以上の情報から、書名で使われる地名として前田氏は何種類も記していたが、正しいものは「牧之原」であることが分かる。また、昭和39年に最初の版が出版されているけれども、金谷図書館に残されているものは、いずれもその後の改訂版であり、昭和39年刊のものではない。それでも金谷図書館のOPACの登録情報では出版年が1964年(昭和39年)とだけ記されているので、昭和39年のものと誤解されても仕方がない。前田氏はそれを見てメモをしたのであろうか。ちなみに、浜松市立中央図書館の登録情報では1986年となっており、22年後の年が記録されているが、これはコピーの製本版を収蔵した年という意味であろう。前田氏は1986年と記していないので、浜松の図書館でこれを見ていないことは確実である。

さて中身の調査結果についてであるが、この資料の4頁右下に「○岡田秀民／為八」(「／」は改行を意味し小栗が付した。「秀民」の左に並べて「為八」が記されている)の文字があり、47頁には岡田為八の履歴明細短冊の内容が記されている。また、78頁には「岡口惣三郎」が、末尾90頁の人名索引には「岡田惣三郎」と「岡田為八」があった。まず4頁の秀民と為八については、秀民の別名が為八であろうと考えた。しかし、末尾の索引では「岡田為八」しかなく、秀民の文字がないところを見ると、為八が通常に用いられていた名前であって、秀民の方が別名と言うべきかもしれない。ただ、47頁にある岡田為八の紹介文中には、なぜか秀民の文字はどこにも記されていない。また末尾の索引では「岡田惣三郎」とあるが、該当箇所にあるのは78頁の「岡口惣三郎」であった。「田」を略記して「口」と書いたのか、本来「岡口」が正しいのに索引で「岡田」と誤記したのかの、どちらかであろうと思われる。特に本書中では「田」を「口」に略記する形は他にはないので、「岡口」が正しいのではないかと想像できるが、どちらが正しいかは正確には分からない。

いずれにせよ、記載がある岡田は上記の2名のみであり、岡田清直・錠次郎の情報は何もなかった。

なお、この資料に関連して、後掲のNo.112で述べる文献中にも、「金谷町役場所蔵」の「牧之原開拓士族名簿」ほか2点を用いて「牧之原開拓士族移住所別氏名」をまとめたリストが収録されているので、参照頂きたい。

**No.44の『牧ノ原開拓史考』(昭和49年、大石貞雄)**については、前田氏は第1編で「牧ノ原」と記し、第2編では「牧の原」としたが、いずれも間違いで、正しくは「牧之原」である。袋井市立袋井図書館と磐田市立中央図書館に蔵書があり、筆者はそこで両方とも確認した。正しいタイトルは『明治維新と茶業 牧之原開拓史考』である。袋井図書館の蔵書は昭和49年3月20日発行の初版であり、

磐田市立中央図書館の蔵書は、昭和56年3月1日発行の再版である。発行元は静岡県茶業会議所である。著者は前田氏が記す通りである。

この本の中にも、末尾に資料として「資料 牧之原開拓士族名簿」が収録されている。その中に記された岡田姓の人物は「岡田忠勤」(231頁)のみであり、なぜか上記No.43に出ていた他の岡田姓の名はなかった。また、この末尾資料の名簿にも、また本書のどこにも、岡田清直・錠次郎の名はなかった。

**No.45の『維新前後の静岡』(昭和16年、小山有言)**は、浜松市立中央図書館に収蔵されており、そこで確認した。但し、昭和16年7月1日に第1刷が発行されているものの、同図書館の蔵書は昭和50年1月30日発行の第2刷である。発行は安川書店で、著者は前田氏が記す通りである。ここにも岡田清直・錠次郎の情報はなかった。

**No.46の『教育と人物』(昭和45年、高天神城戦史研究会)**は、磐田市立中央図書館の蔵書を確認した。昭和45年3月10日に高天神城戦史研究会から発行されている。前田氏は記していないが、著者が明記されており、それは増田実である。末尾に人名索引があるが、そこにある岡田姓の人物は岡田良一郎、岡田良平、岡田平助のみで、本文を含め、岡田清直・錠次郎の情報は何もなかった。

**No.47の『帝国海軍教育史1巻』(昭和48年、原書房)**は、静岡県立中央図書館の蔵書を見た。奥付から正確な書誌情報を記すと、海軍教育本部編『帝国海軍教育史(第1巻)』(明治百年史叢書第334巻、1983年7月30日、原書房)となる。これは復刻本であり、1911年に発行された同名書が原本である。ここには岡田平次、岡田啓介の名は記載があるが(共に480頁)、岡田清直・錠次郎の情報はなかった。

**No.48の『横須賀海軍船廠史』**(大正4年、横須賀海軍工廠)は、浜松市立城北図書館の蔵書を確認した。但し、同館の蔵書は、これも明治百年史叢書第170巻として原書房から復刻発行(昭和48年3月20日一刷、昭和54年10月30日二刷)されたものである。この1冊には、『横須賀海軍船廠史 自元治元年紀／至明治六年紀』【「／」は小栗が付したもので改行を示す。「自元治元年紀」と「至明治六年紀」の部分は「／」の部分で分かち書きになっている。以下も同じ】(大正4年9月27日、横須賀海軍工廠発行、印刷所・横須賀海軍工廠)、『横須賀海軍船廠史 自明治七年紀／至明治二十年紀』(大正4年9月27日、横須賀海軍工廠発行、印刷所・中正社)、『横須賀海軍船廠史 自明治二十一年紀／至明治三十五年紀』(大正4年9月27日、横須賀海軍工廠発行、印刷所・中正社)の3冊がまとめて収録されている。それぞれの本文の1頁目には第一巻、第二

巻、第三巻とも記されている。

前田氏は、発行年月日として原本の大正4年を採用しているが、本当に大正年間に発行されたものを見たのであろうか。No.47の文献も同じ明治百年史叢書の復刻版であるが、それには復刻時の発行年と、復刻版の発行元である原書房の名を記している。それに対して、ここでは復刻版の書誌情報を一切記していないので、復刻版ではなく原本を見たということになる。筆者は間違いなく復刻版を見たが、中身は同じなので、調査上は何の問題もない。

調査の結果は、原本の第一巻部分の197、199、218、222頁に岡田井蔵の名はあるが、復刻版全体を通して、岡田清直・錠次郎の情報はなかった。

**No.49の『横須賀製鉄所の人びと』(昭和58年、富田仁・西堀昭 共著)**も、浜松市立城北図書館の蔵書を見た。現物には、副題として「花ひらくフランス文化」と記されている。また、前田氏が記す2人の著者以外に、監修者として高橋邦太郎の名がある。昭和58年6月17日の発行で、発行元は有隣堂である。ここにも岡田清直・錠次郎の情報はなかった。

**No.50の『箱館戦争始末記』(昭和48年、栗賀大介著)**も、浜松市立城北図書館の蔵書を確認した。昭和48年4月26日、新人物往来社の発行で、著者は前田氏が記す通りである。この本に収められている「箱館降伏人名簿」の中に、「岡田治郎」「岡田斧吉」(以上179頁)、「岡田敬助」(183頁)が、また「箱館戦争幕軍戦没者氏名考」のリストの中に、「岡田斧吉」「岡田鉄之助」「岡田作次郎」(以上186頁)が、更に「蓮華寺賊名前」の「七ノ間」の中に「岡田彦三郎」が、加えて「五稜郭戦争に参加した新撰組百四十二名の隊士編成名簿」の中に「岡田栄太郎(又は岡田米太郎)」(201頁)があることは確認できたが、岡田清直・錠次郎の情報は何もなかった。

**No.51の『新撰組事典』(昭和48年、新人物往来社)**は、浜松市立中央図書館の蔵書を確認した。但し、実物のタイトルは『新選組事典』であり、前田氏が記す「撰」の文字ではなく「選」が用いられている。一般に、新撰組も新選組も両方とも用いられているが、この本の題名は「新選組」が正しい。編者、発行所ともに新人物往来社で、昭和48年3月30日の発行である。ここにも岡田清直・錠次郎の情報はなかった。

**No.52の『勝海舟全集別巻二海舟記』(昭和57年、勁草書房)**は、浜松市立城北図書館の蔵書を見た。実物の奥付から正確な書誌情報を記すと、勝部真長・松本三之介・大口勇次郎編『勝海舟全集 別巻2 海舟宛書簡・海舟別記ほか』(1982年4月15日、勁草書房)となる。

この本に収録されている「24 箱館表脱走人員並びに軍

艦種類、戦没姓名」の中に、松前で戦死した岡田斧吉の名があり(583頁)、また「25 慶應四年四月十一日、水戸御供姓名」の中に小人目付の岡田政次郎(594頁)の名が、更に「26 明治戊辰、徳川陸軍勤務の組織」の中に岡田豊後守(595頁)の名が、「27 戊辰の変、脱走人、諸藩へ預けられし者の姓名」の中に岡田新六(600頁)、岡田松太郎(602頁)、岡田芳次郎(606頁)の名があったが、岡田姓の人は以上で、岡田清直・錠次郎の記載はなかった。

**No.53の『静中静高百年史上巻』(昭和53年、同編集委員会)**は、浜松市立中央図書館の蔵書を確認した。静中静高百年史編集委員会の編で、静岡高等学校同窓会の発行(昭和53年10月7日)による非売品の資料である。上下2巻の本で、発行日も同じである。前田氏は上巻のみしか記していないが、明治期を記しているのは上巻なので、それだけに限定して見たのであろう。筆者も上巻のみを見た。

この本からは、明治19年7月31日発令の県立静岡中学校職員を記したリストの中に「任三等教諭」として「岡田正」があり、彼の明治17年時点の職務校(前任校)は「沼津」(沼津中学校のこと)であることも分かる(76頁)。更に302頁の表から、彼は静岡中学で「数学、地理」を担当し、助教諭兼舎監として明治30年3月26日まで務めたことも分かる。岡田姓の人物について本書から判明する情報は以上であり、岡田清直・錠次郎の情報はなかった。

**No.54の『静岡県教育史』(昭和48年、静岡県教育史刊行会)**は、静岡県立中央図書館の蔵書を見た。同書は静岡県教育研修所の編集、静岡県教育史刊行会の発行によるもので、通史篇上巻下巻、資料編上巻下巻、及び年表統計編の全5冊で構成されている。前田氏は書名だけしか記していないので、5冊のうちどれを見たかは特定できない。しかし、それぞれの発行年月日は通史篇上巻が昭和47年11月3日、同下巻が昭和48年3月31日、資料編上巻と下巻が共に昭和48年10月31日、年表統計編が昭和49年3月31日なので、前田氏が記す昭和48年の刊行は3冊のみとなる。その3冊を調査すれば、前田氏の調査を再検証する作業は済むが、筆者は5冊全部を見た。

筆者にとって本書は初めて見るものではなく、同書の通史篇上巻に用行義塾のことが記されていることは既に承知していた。しかし岡田のことは、この本では何も見た記憶がない。今回、改めて全5冊を調査し直したが、やはり、岡田清直・錠次郎の情報は何もなかった。

**No.55の『静岡県警察史』(昭和53年、同編集委員会／編集委員会)**は、浜松市立中央図書館の蔵書を確認した。但し、同名の文献は次の4冊が存在する。いずれも「静岡県警察史編さん委員会」の編集で、静岡県警察本部から発行されたものである。前田氏は編者について「編纂委員会」または「編集委員会」と記しているが、正しくは「編さん

委員会」である。4冊の内訳は、①『静岡県警察史 上巻』（昭和53年11月25日）、②『静岡県警察史 下巻』（昭和54年3月30日）、③『静岡県警察史 資料編』（昭和54年12月5日）、④『静岡県警察史 自昭和50年至平成14年』（平成14年2月28日）、である。前田氏は昭和53年と記しているのに、氏が見たものは、このうちの①のみであると想像できる。しかし筆者は全部を調査した。

同書から、岡田姓の人物を探すと、明治7年の聴訟課の役人として「岡田透」（権少属、出身は愛知県）がいたこと（43頁）、明治6年の文書の中で浜松県の第一大区に設置の「番人」の1人として「岡田正信」がいたこと（81頁）、その岡田正信が明治7年の浜松市の大火で消防に尽力したとして金壺の賞与を受けていること（387頁）、また、自由民権運動関連の記述の中で岡田良一郎が演説していること（1095頁以下）などの情報が分かる。但し、これらは筆者が求める岡田ではない。他の資料の多くがそうであったように、筆者が求める岡田はここでも皆無であったかと言えば、今回は例外的にそうではなかった。

予想もしていなかったことであるが、本書から岡田清直の名を見つけることができた。明治6年12月18日付けの「番人取扱之儀ニ付伺」と題された文書の中で、差出人として名が記された3人の中の1人として彼の名が記されていた。これは、仕事をした番人等に昼食や草鞋を提供してもよいか等々を浜松県に対して伺いを立てる文書で、連名の3人はいずれも当時の大区長である（88～89頁）。浜松県には3つの大区が設置されており、そのうち岡田清直は第三大区長であったことは、前田氏の本でも紹介されているし、他の資料からも判明している。

大区長の連名による文書なので、岡田個人の意思を伺える資料ではないが、実際に大区長として彼が任務を遂行していたことを証明する珍しい資料である。同様の資料として筆者が知るものは、これを含めて僅かに2例があるのみで貴重なものである。なお、2例のうちのいま1つの例は、掛川学校のために第三大区長の岡田清直が寄附をしたことにより木盃を授与されたことの記録であり、後掲No.106の所で紹介した②がそれである。

しかしながら、前田氏が参考にした文献の中にそれらの記録があるにも拘わらず、岡田が大区長連名で県に要望を出していたことや、木盃を授与されたことは、前田氏の本では無視されている。取るに足らないものと判断したのか、気付いていなかったかのいずれかであろう。これらの事柄は小栗が初めて紹介する情報となる。

**No.56の『静岡県史』（資料編一七・近現代二、平成2年、静岡県）（資料編一六・一七 近現代一、静岡県）**は筆者個人の蔵書で確認した。前田氏は第3編で資料編16を追加し計2冊分を参考文献として記したが、そこで記された「近現代一」の文字は資料編16にのみ有効で、資料編17には無効なので、16と17を併記した場合には不正確な表

記となる。そのことに気付いていないようである。2冊の正確な書誌情報を記すと、『静岡県史 資料編16 近現代一』（編集・発行：静岡県、平成元年3月20日）と『静岡県史 資料編17 近現代二』（編集・発行：静岡県、平成2年3月20日）である。

このうち、資料編16では、「83 静岡藩職員録（明治3・3月末）」の中に「横須賀勤番組」の「世話役」14人中の1人として「岡田錠次郎」の名がある（126頁）【これを①とする】。この「静岡藩職員録」は同書105頁に注記がある通り、静岡県立中央図書館所蔵の「静岡御役人附」のことである。既にNo.3の「静岡御役人附」の所でも紹介した通り、前田氏はこの『静岡県史 資料編16』所収の「静岡御役人附」に依拠しているのに、この部分についてはNo.3と重複することになる。

しかし前田氏は『静岡県史 資料編16』を別の参考文献として独立して表記したのであるから、「静岡御役人附」以外の部分でも利用したことになろう。筆者が求めている岡田清直・錠次郎についても、「静岡御役人附」以外でも使える資料が本書には幾つか存在した。以下にそれを記す。

資料編16に収録されている「10 浜松県官員録（明6年）」の中に、「第三大区長」として「士 岡田清直」の名が記されている（330頁）【これを②とする】。更に「25 学区取締に三宅均他三十九名を任命（明6・2月）」の中に学区取締の1人として「岡田清直」の名が記されており（652頁）【これを③とする】、「46 浜松県番人章程（明6・12月）」の中にも大区長の1人として「岡田清直」の名がある（767頁）【これを④とする】。加えて「1 浜松県一覽表（明6年）」にも「第三大区」の「長」として「岡田清直」の名がある（1259頁）【これを⑤とする】。なお、No.11で言及した「32 静岡県職員録（明11・5月）」（355頁以下）には、岡田清直・錠次郎の名はなかった。

次に資料編17では岡田清直・錠次郎の情報は何もなく、岡田性の人物では岡田良一郎の名が最も多く記載されている。良一郎以外では、君沢郡田方郡の郡長「岡田直臣」（9頁、64頁）、県収税属の「岡田孝一」（62頁）、榛原郡戸長のうち大江村組の「岡田勉治」（68頁）、城東郡戸長のうち東大淵村組の「岡田仙次郎」（69頁）、沼津中学校三等教諭の「岡田正」（73頁）、浜松宿後道の「岡田安貞」（178頁）、清水町人民総代日誌に登場する「岡田林平」（201頁）、自由党静岡支部常議員の「岡田多作」（259頁）、勸業委員名簿に記載のある倉真村の「岡田多作」（338頁）、県の「岡田庶務課長」（500頁）、静岡市で摺附木（マッチ）販売店を開いた「岡田鋤蔵」（520頁）、掛川銀行株主の「岡田良平」（572頁）があるのみであった。

以上のように、岡田清直・錠次郎に関する情報があったのは資料編16のみであった。そのうち①は、表2の【K】の部分（横須賀勤番組世話役）に触れる内容ではあるが、調査された明治3年3月末時点で岡田錠次郎がその地位に



あったことが分かるだけであり、前田氏が記すように、その世話役になったのが明治2年であることは、ここからは分からない。No.3の所でも述べた通り、明治2年という時期は別の情報に依らなければ説明できないのである。

また、②④⑤はそのまま表2の【M】の部分(第3大区長)の根拠として使える証拠資料となる。しかし、③(学区取締)については、前田氏は気付かなかったか、気付いた上で無視したのかは不明だが、岡田の履歴を紹介する文章の中に何も記していない。

**No.57の『明治初期の静岡県史料』(昭和42年、静岡県史料刊行会)**は、その名の文献を幾ら探しても見つけることができなかつた。国立国会図書館の蔵書検索でも、また静岡県内の公立図書館・大学図書館の蔵書を一度に検索できる「おうだんくんサーチ」でも、この名の資料は登録されていない。しかし、「の」の1文字を除いた『**明治初期静岡県史料**』ならば、よく知られた資料であり、静岡県内なら大抵の図書館で見ることができる。

No.17の所で記したように、前田氏は「官員履歴」の資料の収録書として、氏の書籍第1編では「明治初期の静岡県史料」と記したが、第3編では「明治初期静岡県史料・第1巻・静岡県史料刊行会」と書き直している。そこで、「の」を付した書名は前田氏の誤記と判断し、『**明治初期静岡県史料**』がこれであると断定した。筆者は初め袋井市立袋井図書館でこれを見たが、後に筆者個人の蔵書として入手することができたので、手元でも再確認した。

『**明治初期静岡県史料**』は全5巻から成るもので、いずれも編者は静岡県史料刊行会、発行は静岡県立中央図書館蔵文庫である。発行時期は全て異なっており、1年おきに刊行されている。第1巻が昭和42年3月31日、第2巻が昭和43年3月31日、第3巻が昭和44年3月31日、第4巻が昭和45年3月31日、第5巻が昭和46年3月31日である。前田氏が記す出版時期は昭和42年のみであるから、氏は全5巻のうち第1巻のみを見たことになるかもしれないが、全てが昭和42年の刊と誤解している可能性もある。筆者は全5巻の全てを調査した。

結果は以下に示す通り、岡田清直・錠治郎に関する情報が2つ見つかった。他の岡田姓の人物についても幾つか情報を得たが、煩雑になるので、ここでは省略する。岡田清直・錠治郎に関する情報として、以下(1)、(2)の2点を記しておきたい。

(1)『**明治初期静岡県史料**』第1巻では、『**文芸袋井**』第12号(平成30年3月1日、袋井市文化協会・袋井市教育委員会編集発行)掲載の拙稿「用行義塾の教師・岡田先生について」で紹介した『**浜松市史 史料編六**』(昭和38年12月15日、編集兼発行者・浜松市役所)343頁に掲載されている岡田清直の浜松県官吏としての任免記録と同じものが、ここにも掲載されていた(982頁)。下に転記しておく。

浜松県貫属士族

岡田清直

明治七年二月

三十七年一月

明治六年癸酉八月廿七日

一 任浜松県権少属

下等月給下賜ル

同七甲戌二月廿七日

一 免本官

このうち「下賜ル」の部分は、『**明治初期静岡県史料**』第1巻でも、同書の底本となった国立公文書館の静岡県史料(後掲No.106の③のこと)でも、また、『**浜松市史 史料編六**』でも、全てでそのように記されている。しかし、筆者が上記『**文芸袋井**』第12号で、この履歴を引用紹介した際には、筆者のミスで「下賜ス」と記していた(33頁)。正しくは「下賜ル」なので、この場を借りて訂正しておきたい。

「下賜ル」は「下(くだし)賜(たまわ)る」と読むのであろう。「下賜(かし)には、下賜する、下賜される、という言い方があり、それに習った形で「下賜ス」という表現も実際に使われているので、筆者はそれと混同して、上記拙稿で誤記していた。これに対して、「下賜ル」の表現は、下部の「賜(たまわ)る」だけであれば、有り難く受けるという意味で、受け取る側が使う言葉として普通に使われるが、その上に「下」の1字が置かれているので面倒になってくる。受け取る側の言葉であるとすれば、下されたものを有難く頂戴する、と理解できるし、授ける側の言葉であるならば、「下す」を丁寧に表現する言い方と解釈することもできる。いずれが正しいのか、この方面に詳しくない筆者には正確な所はよく分からなかつた。

しかし、調べてみると、「下賜る」や「下し賜る」の用例は他にも幾つも存在しており、例えば国立国会図書館デジタルコレクションのサイト冒頭にある検索窓に「下し賜る」と入れて検索(「下賜る」「下賜ル」ではヒットしない)すると5件が該当する。詳しい書誌情報を割愛して用例のみ示すと、『**飯沼復讐記**』に「秀吉公左文字の刀を初五郎に下し賜る事」が、『**越前松平家家譜**』に「金百円下シ賜ル旨」が、『**創立四十年史**』(岡山県第一岡山商業高校)に「青少年学徒に勅語を下し賜る」があり、その他『**箱根権現堂仇討**』の2種の版に上の『**飯沼復讐記**』と同じ文言がある。また、検索ではヒットしなかつた「下賜ル」の文字も、国会図書館デジタルコレクションにある『**日本教育史資料集 五**』の358頁2行目に、「御加米百六十五石下賜ル」がある。これらの例では、いずれも、下す側の行為を丁寧に表現した用法となっている。岡田の履歴にある「下

賜ル」の文字も、これらと同じと考えてよいであろう。

次に、この岡田の任免記録から分かる事柄と、注目すべき点について記す。この文書から、岡田は明治6年8月27日に浜松県の権少属に任命され、下等月給の支給を受けたが、翌7年2月27日にその任を免ぜられた（解任された）ことが分かる。また明治7年2月時点で、彼の年齢が37歳1ヶ月であることも判明する。以上の情報に関して、本稿では次の2点に着目しておきたい。

第1に、明治6年8月という時期についてだが、これは彼が浜松県の第三大区長に任命された時から、半年後に当たる。『浜松市史 三』（昭和55年3月26日、編集兼発行者・浜松市役所。浜松市文化遺産デジタルアーカイブで全頁の画像が閲覧可）によると、浜松県には明治6年2月に3つの大区が設置されている（13頁）。前出の**No.56**の②で紹介した資料の1つ『浜松県官員録』には、明治6年5月時点での大区長の名が記されているが、その中に、確かに第三大区長として岡田清直の名が記されている（『静岡県史 資料編16』330頁）。2月から5月の間に大区長の人事に異動があったという記録はないので、大区が設定された同年2月の時から、岡田は第三大区長であったと考えられる。

前田氏の記述では、表2の【L】【M】の部分にある通り、「明治6年」に「浜松県権少属」、「浜松第三大区長」と記されていて、この年に2つの肩書きを得ていることが分かるが、記載の順序から、前田氏は権少属が先で、次に第三大区長になったと理解しているように見える。しかし、実態は第三大区長になった方が先であるから、前田氏の記録は順序が逆になっていると言える。

第2に、明治7年2月時点で岡田清直の年齢は37歳1ヶ月であることが分かったので、これを逆算することで彼の生年を推定することができる。明治7年2月は改暦後なので年だけを西暦に直せば済む。明治7年は1874年なので、同年2月から37年1ヶ月前は、1837年1月となる。日にちが分からないが、1月のどこかであることは確かなので、1月1日から31日までを和暦に直すと、1837年1月1日は天保7年11月25日、1月31日は天保7年12月25日である<sup>(8)</sup>。この間のどこかで生まれたことになる。

前掲・表2の【D】の部分で示したように、前田氏は岡田の生年を天保8年と記しているが、上の計算では前年の天保7年末に生まれたことになる。

従って、明治7年2月に37歳1ヶ月であるという同資料の情報を根拠として、前田氏が年齢を推計したのかは疑わしいことになる。あるいは、確かに、上のような発想から年齢を推測したもの、どこかで計算を間違えたか、別の理由からそうに判断した可能性もあるかもしれない。別の理由の場合、最も考えられることは、明治7年で37歳というのは、数え年であると同前田氏は考え、そのため単純に明治7年から37年前の天保7年を生まれ年とはせず、翌年の天保8年が生年と判断したのかもしれない。

それとも、全く別の根拠から、岡田の生年を特定したのかもしれない。いずれにせよ、前田氏が根拠を何も記していないので、全てが闇の中となってしまっている。

ただ、前田氏が岡田に関する参考文献として唯一、明記した「江戸」、すなわち『江戸幕臣人名事典』では、岡田錠次郎の年齢に関して、最初の版では「子歳七十五」と、改訂新版では「子歳四十五」と、異なる年齢ではあるが、明確に年齢が記されている。

『江戸幕臣人名事典』の典拠資料は、国立公文書館にある江戸城多聞櫓に残された資料であるが、その中にある岡田錠次郎の明細短冊の現物を筆者も確認している。そこには、年齢の「四」の部分に相当する文字の左半分が欠けていて、本当に「四」であるのかが判定し難い。最初の版では、調査をした人はこれを「七」と読んでいる。これは、欠けていない残りの部分から、そう読み取ったと思われるが、どう考えても、欠けていない残りの小さな部分だけを見て、それを1文字分の「七」と判定するのは無理がある。初版で「七」と読まれた部分は、他の箇所でも明らかに「四」と書かれている文字の右側部分に形が酷似している。ややクセのある字体ではあるが、筆者にも、この部分は「四」に見える。従って、「子歳四十五」で良いと思う。

そこで問題となるのは、「子」（ね）の年がいつの年を指しているのか、という点である。それを考えることで岡田の正しい生年に近づくことができるはずである。このことに関しては、本稿の後段に置いた考察の中で詳述しているので、それを参考にして頂きたい。

(2)『明治初期静岡県史料』第4巻では、「当県貫属御国内修行人名」【当県は浜松県のこと…小栗注】のリストの中に、「横須賀組」の1人として、「支那学」を学ぶために「自費」で「静岡県」に「留学」した者として「岡田鎌太郎」があり、さらにその岡田鎌太郎は「錠治郎倅」とであると記されている（440頁）。すなわち、岡田錠次郎の子息が岡田鎌太郎ということになる。表2の【G】の情報がこれにあたる。このリストは、「同年【明治5年のこと…小栗注】三月中管内学校教官等級並外交御国内共修行生取調書ヲ上申ス蓋是ヨリ先公達アルニ基ケルナリ左ノ如シ」の文（427頁）から始まる資料の中にあるものなので、明治5年の早い時期までに、岡田鎌太郎の静岡県留学は決まっていたことになる。【G】の部分で、前田氏は「明治5年」という時期を記しているが、その時期を記せたのは、この資料の取り調べ時期を承知していたためであると想像される。この部分の前田氏の記録の仕方には、筆者も異存はない。

以上、(1)(2)の2点が、この史料から分かる岡田清直・錠次郎に関する情報の全てである。

**No.58**の『顕要職務補任録』は、国立国会図書館近代デジタルライブラリーに原本の上下2巻が、また、浜松市立城北図書館に全4巻から成る復刻版が所蔵されているこ

とが分かり、筆者は主に後者で内容を確認した。

但し、前田氏は、文献名として『顕要職務補任録』と記しているが、国会図書館も城北図書館も登録されているものは『明治史料顕要職務補任録』である。「明治史料」の文字が付くか否かの違いであるが、結論から言うと、いずれでもよいと言える。筆者は国会図書館所蔵の原本（Web）も、復刻版も両方とも見たが、復刻版は原本を忠実に全面写植で復刻しているので、本文の中身は同一であった。本書の扉部分には「明治史料」の文字はなく、大きな文字で「顕要職務補任録」と記されており、また本文の左右両端の罫線枠外の全部に「顕要職務補任録」と記されている。本書の中で「明治史料」の4文字（但し全て「明治」と「史料」の分かち書き表記）を含む題名が置かれているのは、目次の冒頭行と巻末最後の行（下巻のみ本文冒頭の行）のみであり、まったく目立たない。同じ本の中で、タイトルが「顕要職務補任録」と「明治史料顕要職務補任録」が混在しているので、どちらを用いてもよいと言える。従って、「顕要職務補任録」と記した前田氏の表記も間違いではない。ただ、復刻版では表紙も背表紙も奥付も、本のタイトルはすべて「明治史料顕要職務補任録」で統一されている。

原本についてタイトル以外の書誌情報を記すと以下のようになる。奥付には本のタイトルの記載はそこにはなく、著作者総代人・金井之恭、著作権譲受人・小嶋彦七、発行所・成章堂の記載があり、これらは上下巻とも共通している。発行日は異なっており、上巻は明治35年9月23日であるが、下巻は明治36年3月5日発行、明治36年5月27日再版発行である。下巻は再版発行のものであるが、復刻版ではそれが無視されて、なぜか初版発行年月日だけが記されている。初版のみを用いて復刻したということになるのであろうか。

次に復刻版について記す。全4巻を順に奥付の情報から記すと以下のようになる。『明治史料顕要職務補任録（「明治」と「史料」は全て分かち書き…小栗注）一』（続日本史籍協会叢書第五期、明治35年9月23日発行、昭和56年8月20日覆刻、編者・日本史籍協会、発行・東京大学出版会【編者と発行元は全て同じ、以下略】）、『明治史料顕要職務補任録 二』（明治35年9月23日発行、昭和56年8月20日覆刻）、『明治史料顕要職務補任録 三』（明治36年3月5日発行【但し再版発行日は記されていない…小栗注】、昭和56年9月20日覆刻）、『明治史料顕要職務補任録 三』（明治36年3月5日発行、昭和56年11月30日覆刻）となる。この復刻版では「一」と「二」で原本の上巻1冊分が2分冊で収録されており、「三」と「四」が下巻に相当する。頁数も全て原本のままである。

さて、この文献の中身であるが、上巻では参議や大臣、また元老院、貴族院、衆議院の議員について記されており、下巻は各県知事や中央各省の部局長クラスの高官、また武官、教官、法官、衆議院議員の追補が記されている。地方

については、静岡県も含め知事クラスのみが記録されているだけなので、岡田清直・錠次郎のような人物が登場するはずはない。実際に岡田の情報は何もなかった。

**No.59の『静岡市史（近代）』（昭和44年、静岡市）**は、袋井市立袋井図書館の蔵書を確認した。書誌情報は前田氏が記す内容に間違いはないが、実物の奥付から、より正確に記すと『静岡市史・近代』（昭和44年4月1日、編集発行・静岡市）である。タイトルのみは表紙の記載に従うと「・」は消えて『静岡市史 近代』になるから、どちらでもよいことになる。内容は明治から第二次大戦後までを扱う全1396頁の大部の書である。ここにも岡田清直・錠次郎の情報はなかった。

**No.60の『静岡市史（近代史料）』（昭和44年、静岡市）**は、磐田市立中央図書館の蔵書を見た。正式なタイトルは『静岡市史 近代史料』（表紙）または『静岡市史・近代史料』（奥付）である。昭和44年4月1日に、静岡市の編集・発行で出版されている。上記No.59と同時に刊行されたことになる。

ここには、先にNo.6で示した「御入国御人数町宿帳」が収録されており、そこには岡田清直・錠次郎の情報がなく、ここでは割愛する。

同書ではそれ以外にも、「〔一三〕 官員録—明治八年—抄録」の中に、浜松県の権中属として「ギフ 岡田治興」と、少属として「ハママツ 岡田良一郎」（「ハママツ」は分かち書き）（共に414頁）が、足柄県の中属として「アシガラ 岡田直臣」（415頁）があったが、他に岡田姓の人物はなかった。また、「〔一四〕 職員録—明治一二年—抄録」の中に、「君沢田方郡 葦山町」（「君沢」と「田方」は分かち書き）の「郡長 岡田直臣」（423頁）と、「佐野城東郡 掛川駅」（「佐野」と「城東」は分かち書き）の「郡長 岡田良一郎」（424頁）の名はあるが、他には岡田姓はなかった。これら以外も全てに目を通したが、ここにも岡田清直・錠次郎の情報はなかった。

**No.61の『静岡市史編纂資料』（昭和2年、静岡市役所）**は、静岡県立中央図書館の「おうだんくんサーチ」によると、磐田市立中央図書館と静岡県立中央図書館等に全6巻が所蔵されていること、また、そのうち昭和2年刊行のものは、1、2、4巻のみであることが分かる。「静岡市史編さん資料」のタイトル名では更に多数のものが確認できるが、前田氏は「編さん」ではなく「編纂」と記しているので、「編纂」の文字をタイトルに用いている資料のみを今回の調査対象とした。すると上の6冊のみに限定される。

筆者は磐田市立中央図書館で6冊全てを確認した。それらの正確な書誌情報を記すと、『静岡市史編纂資料 第壹巻』（昭和2年4月15日、編纂兼発行所・静岡県静岡市役

所【編纂兼発行所は全て同一なので、以下は略す】、『静岡市史編纂資料 第貳巻』（昭和2年5月24日）、『静岡市史編纂資料 第参巻』（昭和3年1月31日）、『静岡市史編纂資料 第四巻 明治維新当時の静岡』（昭和2年12月15日）、『静岡市史編纂資料 第五巻』（昭和3年8月10日）、『静岡市史編纂資料 第六巻』（昭和4年4月10日）となる。

これらの全てにおいて岡田清直・錠次郎の情報は何もなかった。

- (5) 福沢諭吉事典編集委員会編『福沢諭吉事典』（慶應義塾150年史資料集別巻2）（2010年12月25日、慶應義塾）16頁。
- (6) 福澤諭吉著・松崎欣一編『福翁自伝 福澤全集緒言』（2009年5月30日、慶應義塾大学出版会）4頁。
- (7) 注（5）に同じ。
- (8) 加唐興三郎編『日本陰陽暦日対照表（下巻）』（1993年9月30日、ニッポー）1474頁。

（2021年2月26日提出。閲読者の指摘を受け微修正した原稿を5月11日に再提出。本誌本巻同時掲載の（その4）に続く）